

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第十六主日(9/5)礼拝

「キリスト・イエスの埋葬」

ルカ福音書第23章50節から第23章56節

【聖書】

ルカによる福音書23:50 さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で、51 同僚の決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。52 この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出て、53 遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。54 その日は準備の日であり、安息日が始まろうとしていた。55 イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、56 家に帰って、香料と香油を準備した。婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ。

1 イエスの葬り

先週の礼拝では、主イエスが、十字架上で「父よ、私の霊を御手に委ねます」という言葉を最後に息絶えた場面をご一緒に見てまいりました。通常、物語の主人公が死ねば、話しはそこで終わり。せいぜい、続いてもおまけのような「後日談」くらいでしょう。しかし、福音書のイエス・キリストの物語は、主の死では終わりません。四つの福音書は全て、十字架上で死んだ主イエスの埋葬を丁寧に描きます。これは聖書の中では非常に珍しいことです。聖書は、神と人間の物語だと言われます。人間側の代表として様々な人物が描かれていますが、ここまで丁寧に葬りを描かれた人はいません。イエスの埋葬の描き方は聖書の中では異例なのです。そして教会は、キリストの埋葬を省略することなく語り継ぎ、欧米では多くの芸術家がキリストの埋葬を描いた優れた絵画や音楽作品を残しています。聖書は、教会は、信仰者は、キリストの葬りをここまで丁寧に扱って来たのでしょうか。

2 葬り

さて、「“葬られる”というのは、恐ろしいことだ」と語った牧師がいます。葬られる、というのは、全て終わりにされること。葬られる人にはもう何の可能性も残っていないからだと言います。その通りでしょう。現代日本では、

遺体は火葬されますが、自分が棺に横たえられ蓋がしめられ、茶毘に付されるためにお釜の中に入っていくことをイメージすれば、葬られることの絶望感がわかると思います。「葬られる」という言葉には、この世の絶望が刻印されているかのようです。

それは、死んだ者と残された者の関係にも言えることです。亡くなった人とは、もう会うことも話すことも触れ合うこともできません。全ての可能性が取り去られます。ある女性の話しです。その方は、母親とちょっとした言い争いになって言葉がすぎてしまい、母を傷つけた、謝りたい、と思ったけど、すぐには謝れず気まずいまま別れた数日後、母は突然倒れ、意識が戻ることなく亡くなった。大好きな母だったのに、酷い事を言い謝る事もできなかった、悔やんでも悔み切れないと、娘さんは涙を流していました。取り返しがつかない、死んだらおしまい。しかし、人は忘れることができます。どんなに死者を慕い嘆いても、残された者は前を向いて生きていかねばなりません。記憶はじょじょに薄れていきます。「去る者は日々に疎し」。

いつか、自分はこの世界からいなくなるが、全ては過ぎ行き、やがて私が生きて働いた記憶も消える。そのことを思うと、体の中を冷たい風が吹き抜ける思いがします。先ほど読み交わした詩篇49篇の詩人もそうであったのでしょう。死は暴力的に人から命を取り去り、葬られた者の記憶もやがては消え去る。ですから、「死者を葬る」とは、まるで確かに生き、そして死んだ一人の人間、二度とは現れない唯一無二の存在を「過去」「思い出」という墓の中に、封印してしまうようです。

3 アリマタヤのヨセフ

主イエスも十字架の上に非業の死をとげ、そのように葬られる死者の一人となりました。ですが、これは当たり前のことではありません。ローマ帝国は、反乱を企てた廉で死刑となった者の亡骸を遺族達に下げ渡すような事は決してせずに、どことも分からない所に穴を掘り投げ入れていたようです。後に反乱の首謀者の墓を聖地とされるのを避ける為です。アメリカ軍が911テロの首謀者、ビン・ラディンを暗殺した時、墓を作らず遺灰を海に撒いたそうですが、それと同じです。

しかし、ここで主イエスを葬る者として、これ以上ないうってつけの男が現れます。「アリマタヤ出身の議員のヨセフ」です。主イエスを十字架に架けて殺すように、ローマ総督ピラトに願い出て強引に死刑にさせたのは、ユダヤ人の最高法院。ヨセフはその議員です。もともとピラトは「イエスは、ローマ帝国に反乱を企ててはいなかった」と確信していましたから、議員で

あるヨセフの申し出を断る理由はありませんでした。ヨセフは、マタイやマルコ福音書によれば身分の高い金持ち議員であったようです。ルカによる福音書では、身分が高かったり金持ちだったりすると、よく描かれることが少ないのですが、彼は「善良な正しい人」（50節）とされています。

「正しい人」という言葉、ルカ福音書の1章から2章、イエスの誕生物語に出てきた人々を思い出します。洗礼者ヨハネの父母であるザカリヤとエリサベトもまた「正しい人であった」とあります。更に、イエスが誕生したあと、宮参りにエルサレム神殿に上った時にマリア夫妻と出会い、幼子イエスを腕に抱いて「この赤ん坊が待ち望んでいた神からの救い主だ」と確信したシメオン。彼もまた「正しい人」だと言われています。

しかし、シメオンやアリマタヤのヨセフに形容されている「正しさ」は、間違いを犯さない、完全無欠の「正しさ」ではありません。実際、アリマタヤのヨセフは「同僚の決議や行動には同意しなかった」とルカは語り、彼がイエスの十字架刑に反対であったとします。が、ヨセフは、自分の考えを実行に移すことはできませんでした。「イエスは神の子を名乗る冒涇者であり死刑がふさわしい」と最高法院で議決されかけた時、ヨセフは立ち上がり反対の弁論を繰り広げる事はできなかつた。仲間がイエスを引っ立ててローマ総督ピラトの所に連れて行った時も、同僚達の前に両手を広げて立ちはだかり阻止しようとしたわけでもありません。彼は、イエスは無実であると確信していたのに、殆どの同僚を敵に回しイエスの側につく勇気がなかつたのです。このようなヨセフを、先の太平洋戦争の際、戦争に反対であったのに、世の流れに抗いきれず反対の声を上げられなかつた貧弱なインテリ達に例えていた説教者がいましたが、まさにその通りだろうと思います。私達の心の中にも、世間の絶対多数に流される気持ちはあるのではないのでしょうか。では、ヨセフはどのように正しい人であったというのでしょうか。

彼は「神の国を待ち望んでいた」という事において正しかったのです。神の国を待ち望んでいたのは、ヨセフだけではありません。イエス処刑の首謀者であったファリサイ人や律法学者らも、神の国を待ち望んでいました。しかし、彼らは神の国がなんであるかを決めてかかりそれを期待していました。こうしたファリサイ人など一見信仰深い人々にとって、イエス・キリストのあり方は、あらゆる点で彼らの期待に背くもの、とても腹立たしいものでした。新約聖書はそのことを徹底的に描いています。主イエスの行いや言葉、イエスの仲間達の全てが、彼らが予め「神の国にふさわしい」と考えていたものとは全く異なっており、彼らは受け入れることはできなかつたのです。

一方、アリマタヤのヨセフは、彼らと異なり、単純に待ち望む人でした。神に指図がましいことをせず、自分の手で何かを握り締めることなく、ただ

手を広げ、神が実現してくださる約束の成就を無条件に迎え入れようとしていました。だからこそ、ヨセフには、律法学者やファリサイ人が見る以上のものが見えていました。言葉を変えて言えば、アリマタヤのヨセフは、「神を神として、神と正しいお付き合いをしていた人」だと言えるでしょう。

神の国を正しく待ち望んでいたヨセフ。しかし、それだけに、イエスの死を目の当たりにし、非常に失望してしまったに違いありません。彼の期待は実現しませんでした。イエスは処刑され死んでしまったのです。先ほどまで、イエスが生きておられたところ、即ち、神の国の約束のあったところに、今は亡骸が釘付けられています。神の国の希望は、骸（むくろ）となって十字架に釘付けられたまま。

しかし、同僚を敵に回すことを恐れていた優柔不断なヨセフに、ここで不思議なことが起こりました。聖霊が働かれたのでしょうか。彼はローマ総督の所にイエスの遺体を降ろして葬る許可をもらいに行ったのです。マルコ福音書では、「ヨセフは勇気を出してピラトのところに行き」とあります。その勇気はまさに父なる御神が聖霊を通じ、ヨセフの心に起こした奇跡と言えると思います。ヨセフが払った犠牲は、現代に生きる私達が思う以上に大きいからです。この日は金曜日でした。翌日は安息日、それもただの安息日ではありません。ユダヤ人が最も大切にしている過越祭です。過越祭を迎える前に屍体に触れた者は、この祭りの食事に与れません。信仰深いヨセフにとって、過越の食事に与れない事は決して小さい事ではないのです。しかも、その理由が冒涇者イエスを葬ったという事であれば、彼の今後の地位にも信頼にも大きくかかわるでしょう。ですが、ヨセフは自分の社会的地位よりも、イエスの埋葬を優先しました。

生まれて数ヶ月して宮参りをした時、正しい人シメオンの腕に抱かれた幼子イエス。そして、今、主イエスの亡骸の手足から釘が抜かれ、正しい人ヨセフに抱き抱えられて十字架から下ろされます。主イエスは、そのご生涯の最初と終わりに「正しい人」の腕に抱かれたとは、感慨深いものがあります。このアリマタヤのヨセフは、これ以降、聖書のなかには出てきません。たった一度だけ、イエスの人生が尽きた後に、その遺体を抱き十字架から降ろして埋葬したことにより、彼の名前は2000年間、人々の記憶に刻まれることとなりました。

4 女たち

そうして、イエスの亡骸は、誰も葬られた事のない岩に掘られた墓あなへと納められる事となります。ヨセフは亜麻布でイエスの亡骸を丁寧に包み安

置します。ですが、とにかく時間がありませんでした。先ほども言ったように、その日は備えの金曜日。翌日になれば、律法によって働く事を禁じられている安息日です。ユダヤの人々にとって、一日は日没から始まります。イエスが亡くなられたのは午後三時頃で日没まで、イエスの葬りに残された時間はおそらく三時間もなかったでしょう。ユダヤの人々の一日の始まりである一番星が輝く前に、遺体を埋葬せねばならなりません。普通であれば、墓に納める前に遺体をきれいにし、香油を塗り香料をふりかけられるのですが、それらを全て省略したのは致し方ないことでした。

ここで、イエスにガリラヤからついてきた女たちが登場します。彼女たちは、ガリラヤにいる時からイエス一行の身の回りの世話をしていましたから、敬愛するイエス先生をきちんとして葬って差し上げたい、と願いました。そのためには、イエス先生の亡骸をきちんとして葬るために必要なものを漏れなく用意しなきゃならないし、墓を間違えてもいけません。彼女達は、イエスの埋葬の一つも見落とすまいと注意深く観察していたのでしょう。そして、彼女たちは、知らないうちに、イエスの葬りとそれに続く復活の証人となっていたのです。舞台は、2000年前の古代世界。当時、女性の証言は裁判では正式なものとは見なされませんでした。女性は一人前の人間とは認められていなかった、女の言うことなど信用できない、というのです。しかし、不思議なことですが、そのように虐げられていた女達を、神はイエスの死と葬り、そして復活というご自身のご計画の中でも最も重要な、扇の要のような出来事の証人として選ばれました。人間によって蔑ろにされた小さい者、弱い者、社会の主役ではない人々を神は重要人物とし、尊く用いる。まさにイエス・キリストの埋葬も又、父なる御神の御業でありました。

5 何故、イエスは葬られたのか

イエスの葬りはまさに神の御業である、教会はそう確信したからこそ、イエスの埋葬を細かい点を含めて伝えて来たのです。死んで葬られたイエスは三日目に復活します。死と三日目の甦りだけで充分、葬りの場面を省略する事もできた筈ですが、イエスの葬りを神の御業と受け止めて丁寧に描きました。実際、教会は、福音書が書かれるずっと前から、イエスの葬りを大切に語り伝えてきました。新約聖書の中で最も古いのはパウロの手紙であり、イエスの十字架と復活の出来事から20年くらい後に書かれたと推測されています。今日は、月の最初の日曜で、共に聖餐に与りますが、その聖餐式の始まりを伝えるIコリント15章のパウロの言葉も、また、福音書よりも20年から50年前に書かれたもの。教会が教会として認識される前から、主

イエスが葬られた事が大切に語り伝えられていたことが記されています。
「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと」(I コリント 15:3-4) とある通りです。このように、教会は、最初の最初からイエスの十字架の死の後、葬られたことを語ってきました。

それは、主イエスが我々人間と同じように間違いなく死に、そして我々と同じように葬られたのだ、と伝えるためです。実に神の独り子キリスト・イエスが私達と全く同じ人間であるナザレ人・イエスとして、この地上に宿り生きて死んだ、という福音は、徹底的なものでした。「キリストは、確かにイエスとしてこの世に宿られました。しかし、人間と違い死の穢を受ける事はありません、ましてや墓に葬られるなど考えられないこと」などという中途半端なものではなかったのです。寧ろ、聖書と教会はイエスは確かに死んで墓に葬られたことを強調しすぎるほどに強調します。全ての人々がそうであるように、神の御子も苦しんで死に、その亡骸は死の絶望が刻印された墓へと葬られたのです。

ここには深い意味があります。イエスは、生きることと死と葬りの底まで、私達人間が行かねばならない底の底まで降りてこられた。そこで、死を打ち破り、私達を滅びの淵より引き上げるキリストとなられたのです。私達の死の闇に、葬りの闇に、永遠の命の光をもたらしてくださったのです。そこ以外で、人間が神や人に自慢げに見せたいと思うような所でイエスがキリストになられたわけではありません。人が誰にも見せたくないような所、罪の底で、死の極みで、真つ暗な墓の中で、十字架のイエスは私達のキリスト、救い主となってくださった。だからこそ、私達の死はキリスト・イエスの命に飲み込まれ、私達の墓は、光に満たされたキリスト・イエスの墓となりました。キリスト・イエスの復活の後、主イエスを救い主として信じ生きて死んだ者は、キリストの死を死に、キリストの墓へと葬られる者となり、キリストと共に永遠の命へと甦る者となったのです。「葬り」に刻まれた絶望の刻印は消し去られました。このことを忘れっぽい私達が記憶に刻み込めるように、と、天の御神はイエスの葬りにふさわしい人々を選び、葬らせ、教会はそのことを大切に語り伝えてきた。

聖書は、いつかは分からないが、神さまが世界を全く新しく造り変えられる日、時の流れが行き着く終わりの日が必ずくる、永遠の朝が来る、キリストを信じて眠りについた人々は、その時、イエスさまに起こされ神のみ前に出る、と語り、教会はそれを信じてきました。ですから、イエス・キリスト

を信じて生き、死んで葬られる者たちは、過去に閉じ込められた者ではありません。いや、寧ろ、イエス・キリストに名前を呼ばれ起こされ、永遠の命へと立ち上がる朝、永遠の朝へと送り出された者達、輝かしい朝へと送り出される者達と言えるでしょう。

イエス・キリストを信じ生きて死に葬られた人々は、忘れ去られる者達ではありません。彼らは、世界が全く新しくされる甦りの朝、キリスト・イエス様にその名を呼んで起こされるから。父なる神がお忘れになることはないのです。横浜ナザレン教会では11月の召天者記念礼拝で、このことを覚え、教会と関わりを持って召天された一人一人の名前を読み上げます。それは、永遠の朝に、イエス様がその方々の名前を呼び、手をとって起こされる事を思い起こし、教会もその主イエスに倣って名前を呼ぶのです。

私達は、この礼拝の後、日野公園墓地にある教会のお墓に赴き、西原アツ姉妹のご遺骨を墓に納めます。そのお墓は、キリストの亡骸を納めたキリストのお墓です。アツ姉妹は、葬られても一人ではありません。キリスト・イエスが共にいてくださり、その御手によって永遠の朝へと送り出されます。そこで、姉妹は、輝兄を、のぞみ姉妹とそのご家族を、また横浜ナザレン教会の仲間たちをキリスト・イエスと共に待っていてくれます。悲しみの墓、死が支配する暗闇の墓を、命と平安が支配するキリストの墓、光の墓へと変えてくださり、死の絶望を永遠の希望へと変えて下さった父なるみ神を賛美せずにはおられません。